書評
『言語オタクが友だちに700日間語り続けて引きずり込んだ言語沼』

「奇書」と言っていい。YouTube・Podcastの人気番組「ゆる言語学ラジオ」による初の著書、『言語オタクが友だちに700日間語り続けて引きずり込んだ言語沼』のことである。

奇書と言っても、アンチ・ミステリーで複雑怪奇な異端文学ではない。言語学で扱われるいくつかのトピック ―助数詞、連濁、アニマシー、音象徴、フィラー、五十音図、オノマトペ、格助詞など― について、「言語オタク」の水野太貴氏と「言語学素人」の堀元見氏が対談形式で論じ合う体裁の本だ。言語学なんて興味ない、国語嫌い、という人には大して面白くなさそうに思えるかもしれないが、そんな人にこそ、本書を手に取ってほしい。そこは、「沼」である。「理由は分からないがなぜか答えられる」不思議な現象に向き合い、思索を巡らせながら沈み込んでいく、底なしの「沼」なのである。

「〇〇さん好きだわ〜」と「〇〇さんのこと好きだわ〜」は、何が違うのか。日本語の母語話者であっても、その違いを意識的に区別して、妥当な説明を与えることは極めて難しい。ところが、さまざまな状況や文脈に当てはめて解釈してみると、「のこと」の意味がまざまざと浮き彫りになってくる。頭の中に漂っていた靄(もや)が、一気に晴れていく感覚。「？」が突如「！」に変わる快感。それに気づいた瞬間、我々は「言語沼」に沈み始めるのである。

会話で「モジモジアピール」をするためには何を言えばよいか。「スクスク」と「クスクス」はどう違うのか。「川で泳ぐ」と「川を泳ぐ」の違いは何か。日常の言葉の中から身近な素材を掘り起こし、軽妙洒脱な語り口で問いかけと解説が進む。時には大いに（本当に大いに）脱線する。最後はきちんと締める。音声で聞く「ゆる言語学ラジオ」の心地よいリズム感が、紙上で見事に再現されている。

言語学の専門家であれば、この例文の元ネタはあの本だな、あの論文から引用した説明だな、などと推測することもできるだろう。本文中に詳細な出典情報がない点は気になったが、それはむしろ、「『沼』への手引き書」というこの本の特性として理解したい。書かれた内容に興味を持った読者は、巻末の参考文献リストを頼りに、専門書に手

を伸ばせばよい。「なるほど、面白い！」という感覚を読者に提供できていれば、本書の役割は十分に果たされている。

「言語学者が分かりやすく言語学の面白さを伝える本」は、これまでにも多く出版されてきた。『日本語練習帳』（大野晋、1999 年、岩波書店）や『問題な日本語』（北原保雄編、2004 年、大修館書店）は、周期的にやってくる「日本語ブーム」を牽引したベストセラーである。現代日本語文法の面白さを優しく語りかけてくれる『24 週日本語文法ツアー』（益岡隆志、1993 年、くろしお出版）は、筆者を日本語文法の「沼」に引きずり込んだ本だ。身近な言語現象をさまざまに取り上げて探検していく『探検！ことばの世界』（大津由紀雄、2004 年、ひつじ書房）も読んでいて楽しい。最近では、小学生向けの『自由研究 ようこそ！ ことばの実験室（コトラボ）へ 』（松浦年男、2021 年、ひつじ書房）が出色の出来である。

本書『言語沼』がこれらの本と異なるのは、「非言語学者が分かりやすく言語学の面白さを伝える本」という点である。アカデミアの世界に属さない「一介の言語オタク」の水野氏が、専門書や辞書を渉猟しながら、独自の視点で言語（学）の面白さを世に問おうとしている点である。素人学問、などと侮ることなかれ、「ゆる言語学ラジオ」YouTube チャンネルの登録者数は 18.6 万人にも達し（2023 年 4 月 7 日時点）、Twitter のフォロワー数も 5.2 万人、その人気と伝達力は、「一介の言語学者」よりも遥かに大きい。これまで、学問的な正確性が取り沙汰されたり、批判的な見方があったりしたことも事実だが、むしろ「ゆるく楽しく言語の話をするラジオ」「言語学の二歩くらい手前の知識が身につくラジオ」「おもしろ説明おじさん」を目指す彼らのスタンスと目的からすれば、その取り組みは見事に成功していると言ってよい。

一般に、学術研究には、研究成果を一般社会に周知・還元していくことが求められる。アカデミアに蓄積された知的ストックは、学校教育での活用、本の出版、研究発表会の開催、研究施設や研究データの公開といった手段によって、社会に説明・還元されることが望ましい。このようなアウトリーチの重要性は言語学でも同様であるが、「誰に対して」「どのようなメディアで」「どのようにキャッチーに発信するか」などの点を考えると、実はさほど簡単なことではない。「ゆる言語学ラジオ」の二人の活動には、言語学者たちも学ぶべきところが多いのではないか。

本書『言語沼』を、著者の堀元氏自身は「ムダの多い本」と評しているが、同時に、そのムダがいかにムダでないかも説得的に記している。本家「ゆる言語学ラジオ」の番組内で語られた「厳密な説明からじゃ得られない栄養がある」という一言は、彼らの信条を表したものだろう。言語学の専門家ではない二人が、取るに足らないムダ話や壮大なホラ話を交えながら言語学の妙を語り、言語について考えることの楽しさを読者に追体験させ、「言語沼」へと誘う。こんな本は、今までになかった。本書が「奇書」たる所以である。

2023 年 4 月 8 日

丸山岳彦（専修大学）